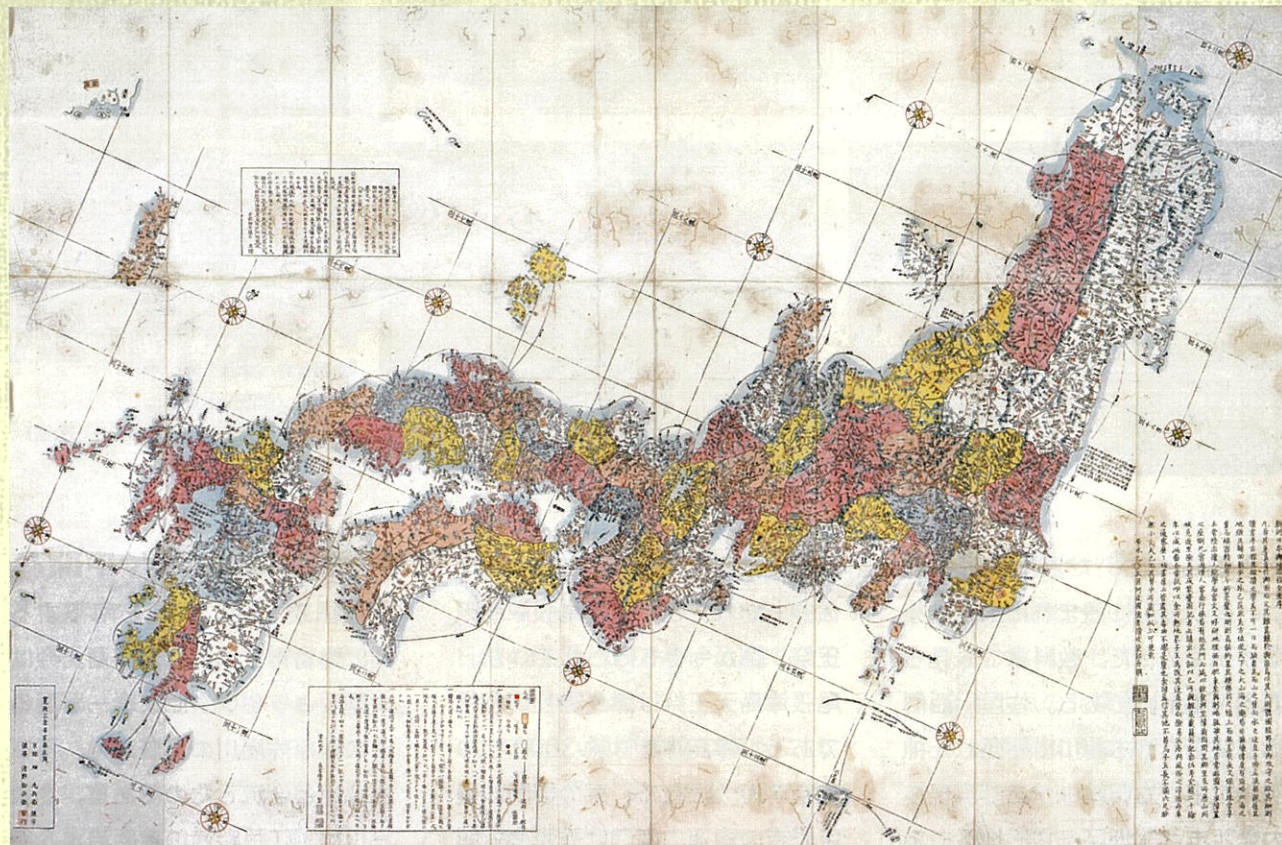


なが く ぼ せき すい 長久保赤水が伊能忠敬より 42年も前に作った日本地図

●長久保赤水顕彰会会長 佐川 春久



▲改正日本輿地路程全図 1791(寛政3)年第2版(4刷り目)84.6×128.8cm 高萩市歴史民俗資料館所蔵(長久保赤水顕彰会寄贈)茨城県指定文化財
赤水生存中の最後の集大成地図と考えられている。初版図との大きな違いとしては、海路(港から港までの距離)や部分図(郡名の記入)、図の左上の潮汐考証部の付加などが挙げられる。さらに、地名表記などの情報量も約4200から約6000と飛躍的に増加し、国の色分け彩色も変化した。同じ赤水図でも初版とは、全く別物であることがわかる。赤水が存命中に編集したのはこの第2版図までであり、赤水図はこれで完成した。第3版以降は、第2版の情報をそのまま使用することで刊行されていった。



▲改正日本輿地路程全図(大阪周辺を原寸で表示)

長久保赤水顕彰会
ホームページはこちら



▶長久保赤水像(自画自賛)赤水自筆93.8×43.7cm
高萩市歴史民俗資料館所蔵(長久保甫氏寄贈)重要文化財
赤水は、1782(天明2)年66歳の時、藩主から葵の紋の衣服を賜った。この自画像は、天明2年から6年の間に描かれたものと思われる。



■情報を収集して編集した赤水、 歩いて測量した忠敬

これまで学校教育で学んできた日本地図の歴史は非常に断片的で、伊能忠敬(1745~1818)が測量した日本地図だけが最も顕著に押し出されてきた。

ところが、忠敬から遡ること42年前に水戸藩の儒学者、長久保赤水(1717~1801)は初の経緯線入りの刊行日本地図『改正日本輿地路程全図』(通称:赤水図)を1779年に完成させ、翌年大阪で発行して、大衆化した。

伊能図は幕府により秘蔵され、実は江戸時代の庶民や幕末の志士たちの目に触れることはなかった。これに対し、赤水図は、江戸時代末期までの約100年間のベストセラーとして版を重ねた。浦賀(神奈川県横須賀市)にペリー艦隊が来た頃も、庶民や志士たちが見ていたのはこの赤水図なのだ。

松下村塾で教えた長州藩吉田松陰も愛用していたことが、故郷・山口の兄への手紙に記されている。忠敬も、測量時に赤水図を携帯していたと測量日記に書き残している。

伊能図との比較で興味深い点はまだある。伊能図は、全国の拠点を歩いた測量図として有名だが、赤水図は、水戸彰考館の各藩国絵図や同時代に活躍した学者の書物のほか、家の前の街道をゆく旅人などから多くの情報を収集して比較検証を重ねた編集図だ。天文学の知識も取り入れ、日本で初めて経緯線が描かれた刊行日本地図として世に出た。

その赤水図を含む資料群が学術的にも高く評価され、2020(令和2)年9月に赤水関係資料693点が国の重要文化財に指定された。

さて、この長久保赤水だが、常陸国赤浜村(現在の茨城県高萩市赤浜)の農民として生を受け、その後勉学を重ねて、晩年には第6代水戸藩主治保の侍講(学問の師)を務めた。藩主に学問を教えるだけでなく、藩への政策提言を行い、天文学・地理学・農政学者としても幅広い業績を残した。この侍講を担った赤水は、フィロソファー(哲学者)の範疇に入るのである。

赤水は日本地図だけでなく、中国(清)の地図や世界地図、中国歴史地図帳(13図)、蝦夷之図、朝

鮮図なども製作した。最晩年には、徳川光圀が始めた『大日本史』地理志の編さんに従事するよう藩主治保の特命が下った。10年間に及んだ仕事を預けたことは、治保が赤水を手放したくなかった証ともいえる。

■赤水図を教材にした授業の実現を

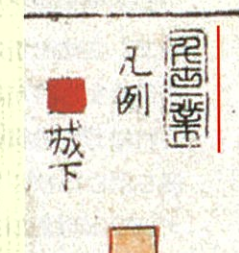
すでに、茨城県高萩市内の中学校や県内の高等学校では、赤水図の原寸大レプリカ(複製)を使った地理教育が実施されている。

伊能図は、沿岸はよく書かれているが内陸部は殆ど空欄である。一方の赤水図には、江戸時代の地理空間情報が満載である。このため、地理・歴史探究の教材としては最適である。全国の先生方にも、ぜひ、この赤水図の原寸大レプリカを使った実践をお願いしたい。日本全国、どこへでも赤水図の5倍拡大タペストリー(床敷き)も持参し、赤水を知っていただく一助になるなら、ボランティアで出向きたいと私は考えている。

■赤水が地図製作で大切にしたこと

赤水が地図製作で一貫して重要視したのは、使う人の利便性とわかりやすさである。利用者が携行して動くことを想定しており、赤水図は24分の1の約28×16cmに折り畳める。赤水は現状に相違があると知れば修正を重ね、正しい情報にアップデートする努力を重ねた。距離表示では、10里(約40km)を1寸(約3cm)で表した。地名等を記した頭の一文字目がその位置を示し、一文字が3里(約12km)の距離を示した。一般庶民に広く活用された背景には、赤水の創意工夫とたゆまぬ努力があり、これは今後、大いに評価されていくことだろう。

なお、赤水図凡例の関防印(初めのしるし)に「千古一業(千年万年、永遠に残る一大事業)とある。赤水が有用な地図製作に生涯をかけた決意表明である。



▲改正日本輿地路程全図(凡例の右上部分)

●佐川 春久(さがわ はるひさ)

1949年東京都中央区築地生まれ。茨城県高萩市役所に38年間勤務。県内外で講演、新聞寄稿を多数行う。監修を務めた映画『その先を往け!日本地図の先駆者 長久保赤水』がYouTubeにて公開中。

